

2009/Winter

和わす やまと's YAMATO

特 集

第十七代上杉家当主 上杉邦憲氏に聞く
「坂の上の雲」の舞台 松山

お 客 様 介 紹

●上毛新聞社様 新印刷工場「上毛新聞印刷センター」

話 題

榛名湖イルミネーションフェスタ'09

名水探訪

群馬県 少林山の清涼(ちんりゃん)水



上杉謙信公から現代まで伝わる仁愛と義の精神

第十七代上杉家当主 上杉邦憲氏に聞く



上杉邦憲（うえずぎくにのり）氏

昭和18年（1943年）生まれ
東京大学工学部航空学科宇宙コース卒業。東京大学大学院工学研究科航空学専攻修士課程修了。工学博士。
独立行政法人宇宙航空研究開発機構 名誉教授。NPO法人 北海道宇宙科学技術創成センター 副理事長。
財団法人 無人宇宙実験システム研究開発機構 顧問。米沢市上杉博物館 名誉館長。
父・隆憲氏は茂憲公の嫡孫、母・敏子氏は徳川氏十七代当主・徳川家正公の二女。霞会館会員。

戦国時代の名将である上杉謙信公を祖とする米沢藩主上杉家は、室町幕府の衰退後、新しい秩序を求め変革が続く激動の時代を生き抜き、徳川幕藩体制のもとでは、財政逼迫など幾多の危機に見舞われながらも改革の実践により家系を存続してきた。明治維新後も、沖繩県令（現在の県知事）となった茂憲公が、私財を投じて困窮する弱者に救いの手を差しのべるなど、地域発展のために力を尽くす。

その曾孫である第十七代当主の上杉邦憲氏が、名家の伝統と精神を、現在も守り続けている。当主上杉邦憲氏に、謙信公が記した「上杉謙信公家法十六箇条」をはじめ、群馬県と謙信公の関わり、上杉鷹山公の藩政改革、上杉茂憲公の沖繩での行政改革などについてのお話を、東京都千代田区の霞会館（戦前の華族会館）にて伺った。300年以上にわたる時代の変遷を経ながら、脈々と受け継がれ培われた、上杉家の「仁愛」の心と「義」の精神に、深い感銘を覚えた。

上杉謙信公家法十六箇条は現代にも通じる大切な言葉

上杉氏――

「上杉家には『宝在心（ほうざいしん）』といつて、宝は自らの心の内にあるという教えがあります。これは、謙信公が自らを戒めるために定めたものと伝わっています。現在でも上杉家の集まりがある際には、常に携帯している『宝在心』である『謙信公家法十六箇条』を皆で唱和し、祖先から受け継がれてきた精神を反復しています」

上杉氏は、「謙信公家訓十六箇条」が印刷された二つ折りのカードを取り出して見せてくれた。そこには、長い年月、代々受け継がれてきた確かな歴史の重みを感じとれた。

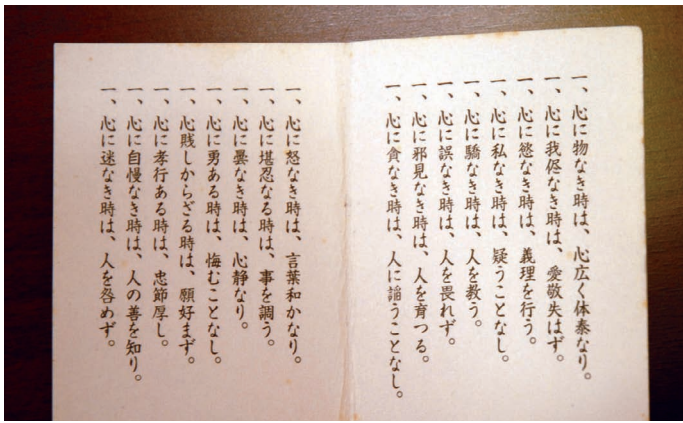
上杉氏――

「謙信公は禅の教えを追求し、達磨大師と中国の皇帝の禅問答での『不識（ふしき）』という、心を空にした状態で悟る境地に至ったということ。春日山林泉寺の門に『第一義』という言葉が掲げられていますが、それは百問あるといわれる禅問答の第一番目の

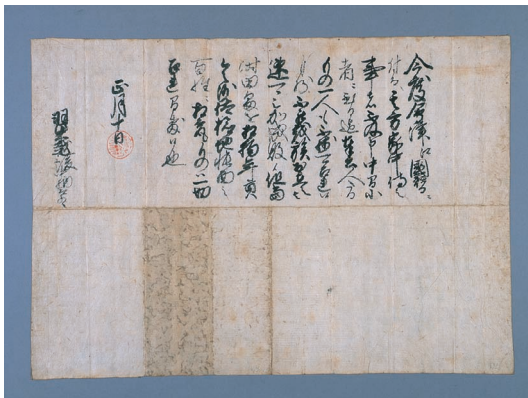
最も大切な教えで、これが『不識』に通じています。謙信公は自らを不識庵と名乗るほど、その境地に傾倒していたわけですね」

不識とは、「しらない」という意味ではない。頭での思いや本からの知識ではなく、あらゆる雑念を捨て、仏様に身も心も預け、その教えとともに生きる時に悟りが開かれ、自らも仏様になれるということを表す。頭でわかったつもりでも『不識』の真髓が得られるものではない。

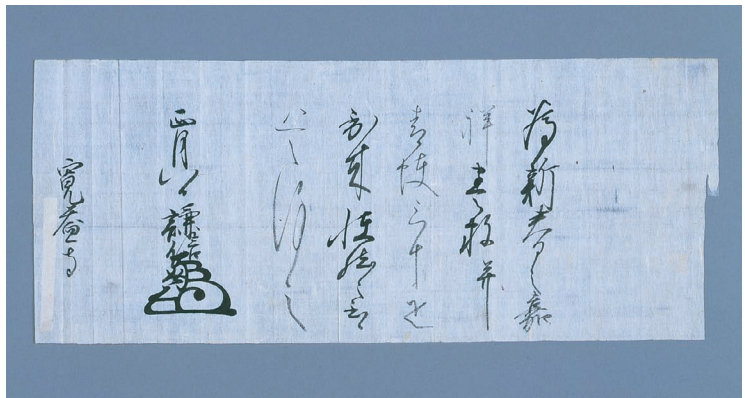
謙信公の戒名は不識院殿心光謙信。生涯を通じて『不識』を追求し、その精神を養子の景勝公に伝え、「義」を重んじる考え方へと昇華され、現代まで受け継がれてきた。



邦憲氏が常時携帯している上杉謙信公家法



国宝 豊臣秀吉朱印状 (米沢市上杉博物館蔵)



国宝 上杉家文書 上杉謙信書状 (米沢市上杉博物館蔵)

上杉謙信公家法 十六箇条

- 一、心に物なき時は心広く体泰なり
「腹に物(いちも)背に荷物」と言われているように、腹に物あると、それが重荷になる。心に物が無い時はこたわりを持たずに、心が広くなり、身体が伸びやかになる。
- 二、心に我儘なき時は愛敬(あいぎょう)失はず
我儘(わがまま)な心を持たなければ、人にも柔軟に接することができる。人を慈しみ敬う心⇨愛敬を失わない。
- 三、心に欲なき時は義理を行う
欲が無いからこそ、義理の道を行うことができる。謙信公は領土欲を持たず、大義によって動く人であった。
- 四、心に私なき時は疑ふことなし
人を疑うのは、私心があるからである。私心を捨てれば、人への疑念は起こらない。
- 五、心に驕りなき時は人を敬ふ
驕(おこり)高ぶる心がなければ、人の真価を認め、人を敬うことができる。
- 六、心に誤りなき時は人を畏れず
心にやましいことがなければ、どのような人でも畏れる事はない。
- 七、心に邪見なき時は人を育つる
邪(よこしま)な心とは、流される心。天地を貫いた心を持つて、その生き様をみて周りの人が自然に育っていく。
- 八、心に貪りなき時は人に諂うことなし
貪(むさば)り欲しがる心を持たなければ、人に諂(へつらい)い、おもねることがない。
- 九、心に怒りなき時は言葉とらかなり
心に怒りを持たなければ、言葉は和(やわ)らかである。
- 十、心に堪忍ある時は事(こと)のう
忍耐の心で堪え忍ぶならば、物事を順調に進めることができる。
- 十一、心に曇りなき時は心静かなり
心が曇ると、心がざわつく。曇りが無ければ穏やかでいられる。
- 十二、心に勇みある時は悔(くや)むことなし
勇気を持つて実行すれば、悔(くや)むことはない。
- 十三、心賤しからざる時は願(ねが)い好まず
心に賤(いや)しさが無ければ、神仏に願(ねが)い事をする事もない。
- 十四、心に孝行ある時は忠節厚し
親孝行の心があれば、主君に忠節を尽くす心も厚い。
- 十五、心に自慢なき時は人の善を知り
自慢の心が無ければ、人の善が良くわかる。
- 十六、心に迷いなき時は人を咎めず
心に迷いがなければ、人を咎める事もない。人を咎めるのは心の迷いが原因である。

謙信公と上州



上杉景勝 (うえすぎ かげかつ) 公

上杉家二代目第2代藩主当主(米沢藩初代藩主)。母は謙信公の実姉・仙桃院。実父の死後、謙信公の養子となり、近習であった兼統と共に春日山城に入る。景勝公は謙信公の薫陶を受けて育ち、「仁愛」や「義」の精神を藩政に反映させた。

(米沢市上杉博物館蔵)



上杉謙信 (うえすぎ けんしん) 公

上杉家藩祖。後に「越後の虎」とも「越後の龍」とも恐れられた戦国時代の武将・大名。内乱の続いた越後を統一し、他国からの救援要請には秩序回復のため幾度となく出兵した。「義」を掲げ戦うが、領土拡大目的の戦はしなかった。戦国最強の猛将でありながら、禅を学ぶ聖将として知られる。

(米沢市上杉博物館蔵)

上杉氏——

「謙信公は関東管領として、今の関東地方を掌握していました。それはちょうど、ヤマトさんの営業エリアと重なりますね。また、前橋の厩橋城(うまやばしじょう)は謙信公の拠点であり、前橋を中心に活躍した時代もあったのです」

永禄3年(1560年)8月、謙信公は越後の軍勢を率いて、春日山城から三国峠を越え現在の群馬県・猿ヶ京に入る。当時の関東管領上杉憲政が、室町幕府の同意を得ずに同地を支配していた北条氏康に追われ越後に逃れていたため、上杉家の関東奪還の目的があった。

また、謙信公が永禄2年(1559年)2月に、將軍足利義輝に謁見するため上洛した際、將軍から関東管領・憲政への援助を命じられ、関東への進出を決意したともいわれている。いずれにせよ、関東を北条氏の支配から上杉氏の守護領国体制に復帰させることが、謙信公の関東進出の大義であった。

謙信公は沼田城を攻め城主の北条康元を討ち取り、大軍を率いて厩橋城を攻め落とし、北関東を制圧。厩橋城を関東南進の拠点とし、永禄4年(1561)には、北条氏の本拠地・小田原を攻める。

南関東に軍を進めつつ、謙信公は反北条の武士たちを結集する。そして、結集した武将たちの紋所を集めた証文「関東幕注文」を作成するが、そこには厩橋衆(長野氏)、白井衆(白井長尾氏)、沼田衆(沼田氏)、桐生衆(佐野氏)などの名が載っており、謙信公

はそれら数万の軍勢を率いて小田原城を囲んだ。

しかし北条氏康の抵抗が予想外に激しく、民衆を巻き込んだの乱戦を避けるためもあってか、ほどなく撤兵する。その際、謙信公は上杉憲政から、「上杉」の名跡と関東管領職を譲られることになった。

その後、上杉勢は武田信玄の関東進出の際にも、厩橋城を拠点として武田勢の侵入を防いだ。天正7年(1579)に謙信公が死去。家督をめぐって二人の養子、景虎と景勝とが争う御館の乱が勃発する。

戦に勝利した景勝公の家臣・直江兼統公が、その後の上杉家の執政として「愛」と「義」の精神のもと、藩を導いたことは世に名高い。豊臣政権下において、越後から会津に移り120万石の大名となった景勝公だが、米沢30万石へと移封される。しかし、上杉家は米沢城本丸に安置した謙信公の遺骸を精神的な支えに、兼統公による卓越した藩経営のもと、苦難の時代を切り抜けた。



前橋城跡の石垣

鷹山公の藩政改革



上杉鷹山(うえずぎ ようざん) 公

上杉家第10代米沢藩主(米沢藩第9代藩主)。疲弊した民心の回復を図り、失墜した藩政を一新して窮地を救った米沢藩中興の祖。江戸時代を代表する名君として知られ、謙信公の教えや景勝公の施政を見本にした。(米沢市上杉博物館蔵)

ますが、リンカーン米大統領が『人民の人民による人民のための政治』と言ったのは1863年です。鷹山公が示した藩主の心得『伝国の辞』は1785年ですから、80年位前に、鷹山公は既に人民のための政治を実践しようとしたわけです」

『伝国の辞』(でんこくのじ)とは、鷹山公が次期藩主・治広公に家督を譲る際に申し渡した、3条からなる藩主としての心得である。

一、国家は先祖より子孫へ伝え候国家して我私すべき物にはこれ無く候(国家は先祖から子孫に伝えるのであって、藩主が私有しているものではない)

一、人民は国家に属したる人民にして我私すべき物にはこれ無く候(人民は国家に帰属しているのであって、藩主が私有しているものではない)

一、国家人民の為に立たる君にて君の為に立たる国家人民にはこれ無く候(国家と人民のために藩主がいるのであって、国家や人民は藩主のためにはあるのではない)

フランス革命が民主主義の土台となった「自由・平等・博愛」を掲げたのは1789年のことであり、鷹山公の『伝国の辞』はそれよりも4年早く、市民を中心に据えた政治を標榜していた。江戸時代と

いう封建社会の中で、主権在民を基本にした近代民主主義の理念を掲げた点は、驚嘆に値する。

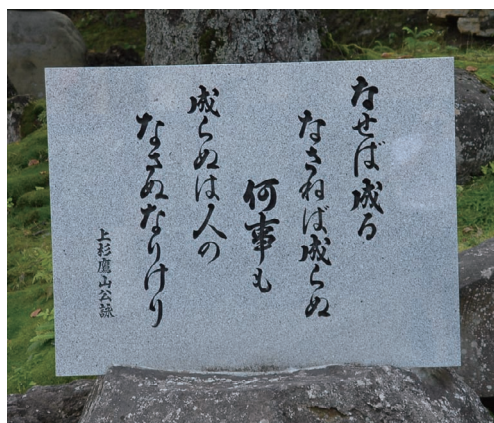
江戸後期になると、ほとんどの藩では借金が増え、財政危機に直面していたが、特に米沢藩は、領地の減少と家臣数の多さ、たび重なる凶作などで、他藩にも増して厳しい状況にあった。米沢藩の財政再建に着手した鷹山公は、役人の贅沢や無駄を見直すという、「行政改革」を断行した。旧態を守るうとする藩内の重臣からの抵抗にも合ったが、彼らを粘り強く説得し、自らが実践する改革が藩内の支持を得ていることを確認、しだいに反対勢力を処分しつつ改革をおし進めた。

わずか17歳で藩主となった鷹山公は、藩校・興譲館を再興させた。師の細井平洲から受けた学問の影響もあり、強い意志で米沢藩の立て直しに取り組んだという。

「受け次ぎて国の司の身となれば、
忘れまじきは民の父母」

これは鷹山公が家督を継いだ時に詠んだ歌であり、藩主とは民の親であり、子を思う親の気持ちで民に接しようとの決意を表明したものとされる。領民の安定した生活を確保するため、鷹山公が行った改革の功績は、現代に至るまで広く讃えられている。

不屈の精神で改革を断行した名君の歌(左の碑)は世の人々の多くが知るところである。



歌の碑



上杉鷹山公の銅像

江戸時代中期、上杉家の10代当主・上杉治憲(鷹山)公は、領地返上寸前の米沢藩を、謙信公、景勝公時代の儉約を旨とした政策に戻すことを実行。直江兼続公の200回忌法要に御香華料を捧げ、その事業を模範にしたともいわれる。

上杉氏――

「鷹山公の改革では、まずは領民の生活を豊かにすることに力点が置かれています。明和4年(1767)に米沢藩主となつてい

沖縄県令 上杉茂憲公の遺徳



上杉茂憲(うえずぎもちのり)公
上杉家第14代当主(最後の米沢藩主)。明治2年、版籍奉還により米沢藩知事となる。明治14年に沖縄県令兼判事に任命される。沖縄本島はじめ県内各島を視察し、離任する時は私財を投じて人材育成に貢献した。(米沢市上杉博物館蔵)



上杉県令沖繩本島巡回日誌
(個人蔵、写真提供 米沢市上杉博物館)

「門前二向ヒ、老松道ヲ挟ミ、庭ニ芝生ヲ敷キ、床ニ鄭元偉ノ書ヲ掲グ(軒下の敷き石)ニ水仙、瑞聖花(さんだんか)ニ相映シ、サイサン(美しい色どり)タリ。門前二小池アリ。ソノ西ハ一望無限、皆薯田麦畝ナリ」

「番所の構内は水仙やさんだんかの花が咲き誇っており、番所の西側は一軒の家もなく、芋畑が見渡す限り続いていた」と記されたもので、当時の番所周辺の様子を知らることができる。この記述にとどまらず、同日誌は明治初期の沖縄の世情・現況を知る上での貴重な資料となっており、沖縄をより詳しく知ろうとする茂憲公の熱心な姿勢が読み取れる。同村の郷土史では、「歴代の地方長官の中で茂憲公ほど沖縄を愛し、彼ほど沖縄のために尽くした人はいない」と称えられており、島内の多くの人に尊敬されていたという。

また、具志頭(ぐしちゃん)村(現在の糸満市付近、ひめゆりの塔で有名)は、「返済するのに56年を要する1万6千円にのぼる巨額な負債を抱える農民」のことや、「役人を除いてどの家の住人も小さな家に住み、粗末な着物を着ている」等の記述があり、困窮した農民の状況が浮き彫りにされている。

上杉氏――

「茂憲公は沖縄の社会を困窮から救うには教育が必要だと痛感し、私財15000円(現在の数千万円)を投じて、県費留學生の形で5人の有能な青年を東京に送り出した。後にこのことを知った沖縄の篤志家の方が、『茂憲公の恩に御礼をしたい』と申

江戸幕府が大政奉還し明治新政府が発足した際、米沢藩最後の大名は、かつて戊辰戦争を戦った第13代上杉斉憲公であった。明治維新後、斉憲公は家督を茂憲公に譲り隠居した。

上杉氏――

「茂憲公は鷹山公から四代目の第14代当主で、明治14年(1881)に沖縄県令(官製知事)に任命され、沖縄の実情をつぶさに調べました。民衆の貧困ぶりを目の当たりにし、県民を哀れに思い、貧しさの原因である重税を軽くしようと明治新政府に意見書を出しましたが聞き入れられず、わずか2年で更迭されてしまいました」

茂憲公は沖縄県民の生活状況を詳細に調査し、その調査結果を「上杉県令沖繩本島巡回日誌」として記録している。沖縄本島を巡回視察する際、茂憲公はよく整備されていない道を歩いたこともあり、各宿場の間切(明治時代の地方行政区)役人の案内で、庶民の暮らしを身近に見るように努めたようで、そうした記述が同日誌の随所に見受けられる。

島の中央部に位置する読谷(よみたん)村には、「喜名番所(きなばんしよ)」という明治時代の役所が史跡として保存されており、茂憲公が明治14年(1880)12月2日に同村に立ち寄ったことが、次のように記述されている。



沖縄県 喜名番所跡



平和記念公園から望む沖縄の空と海

し出られ、平成6年には、沖縄県人材育成財団(会長・大田昌秀沖縄県知事)より感謝状をいただきました。その感謝状は螺鈿(らでん)を埋め込んで作られた大変美しいもので、今でも大切にしています。同年には沖縄市と米沢市が姉妹都市になり、茂憲公の仁愛の精神は、今も語り継がれています」

「精神性」こそ真の豊かさ 日本独特の価値観

戦国時代から江戸、明治維新、そして太平洋戦争と、激動の歴史にさらされ、風雪に耐えながら家名を保ち、その伝統を維持するには大変な努力を要したと推察される。そこには代々受け継がれてきた深淵な教え「精神」というものがある。それらの結集こそが日本の良き文化・風習となってきたとも考えられるが、現代では風化の一途をたどっている。

目先の利益にとらわれることなく、先人が醸成してきた「精神性」を維持し伝承することこそ、真の豊かさなのかもしれない。

上杉氏

「世間を騒がせた最近のニュースで、株の取引に不正があったとして当局に検挙された人がいました。その人が拜金主義的な発言をしていましたけど、お金より大切な本当の豊かさ、充実感とは、各人の心の内にあると思います」

謙信公はじめ、欲を抑え領民の幸福を望んだ名君達の教えから、本当に大切な何かを真剣に探さなければならぬ時代が来ている。

上杉謙信公の主要年表

- 1530年(享禄3年) ● 越後守護代・長尾為景の子として春日山城にて誕生。
- 1543年(天文12年) ● 元服し、長尾景虎と名乗るようになり、栃尾城(長岡市)へ入る。
- 1548年(天文17年) ● 兄・晴景が隠居し、家督を継ぎ春日山城に入る。
- 1551年(天文20年) ● 坂戸城主・長尾政景を服従させる。
- 1552年(天文21年) ● 北条氏の攻撃を受けた関東管領・上杉憲政が謙信を頼って越後へ逃れてくる。
- 1553年(天文22年) ● 第1回川中島の戦いで武田信玄と対峙する。上洛し、後奈良天皇と将軍・足利義輝に謁見する。
- 1560年(永禄3年) ● 3月、越中に出陣し、神保長職を破る。5月、三国峠を越え関東へ出陣する。厩橋城(前橋市)で越年。
- 1561年(永禄4年) ● 3月、北条氏康本拠・小田原城を包囲。鶴岡八幡宮で関東管領に就任。8月、第4回川中島の戦いで武田信繁らを討ち取るも被害甚大で引き上げる。
- 1574年(天正2年) ● 関東へ出陣し、北条氏政軍と戦う。
- 1577年(天正5年) ● 9月、能登・七尾城を攻略し能登を統一。10月、手取川の戦いで柴田勝家を総大将とする織田軍を打ち破る。
- 1578年(天正6年) ● 春日山城内で死去。49歳。後継者争いの御館の乱勃発
- 1579年(天正7年) ● 上杉景勝が御館の乱に勝利し家督を相続



上杉謙信公の銅像

上杉鷹山公の主要年表

- 1751年(宝暦元年) ● 7月、高鍋藩主秋月家の二男として江戸の一本松邸で生まれる。
- 1760年(宝暦9年) ● 上杉重定との養子縁組により次期米沢藩主に決定する。
- 1763年(宝暦12年) ● 竹俣当綱、木村高広、荻戸善政、佐藤文四郎などを近臣にする。
- 1767年(明和4年) ● 9月に大倭約を実行し、自らの生活費を十分の一に抑えさせた。
- 1769年(明和6年) ● 上杉重定の長女・幸姫と結婚。8月24日に藁科松伯が亡くなる。10月に米沢へ初入国。
- 1770年(明和7年) ● 4代藩主綱憲の子の式部勝延の娘・お久野(お豊)を側室にする。
- 1771年(明和9年) ● 5月に儒学者・細井平洲が初めて米沢に来る。6月に旱魃のため、愛宕神社で雨乞いの祈願を行う。
- 1775(安永4年) ● 桑・楮・漆を各百万本植える計画し植立を始める。
- 1782年(天明2年) ● 3月に正室・幸姫が30歳で病死する。奉行・竹俣当綱失脚。天明の大飢饉
- 1785年(天明5年) ● 2月に隠居し、伝国の辞を送り養子の治広が第10代米沢藩主となる。
- 1791年(寛政3年) ● 1月に荻戸善政を再勤させ中老に任命する。上書箱の設置。藩政費用を半分にして財政再建に取り組みゆるんだ改革を改めた。
- 1802年(享和2年) ● 名を鷹山と改名。
- 1822年(文政5年) ● 3月に上杉鷹山が72歳で死去。 9月に治広が59歳で死去。
- 1826(文政9年) ● 国の借金のおよそ半額を返済する。



上杉鷹山公の銅像

上杉茂憲公の主要年表

- 1844年(天保15年) ● 上杉家13代当主斉憲の長子として米沢城に誕生
- 1868年(明治元年) ● 米沢藩降伏。斉憲公引退により最後の米沢藩主に。
- 1869年(明治2年) ● 戊辰戦争終結。藩籍奉還により米沢藩知事となる。
- 1872年(明治5年) ● イギリスに遊学
- 1876年(明治9年) ● 宮内省第二部長に就任。
- 1881年(明治14年) ● 沖繩県令を命じられる。
- 1883年(明治16年) ● 沖繩県令を免じられ、元老院議員となる。
- 1884年(明治17年) ● 伯爵を授けられ、伯爵選挙会で貴族院議員に当選
- 1897年(明治30年) ● 再度貴族院議員に当選
- (1904年(明治37年)) ● (日露戦争勃発。)
- 1919年(大正8年) ● 勲二等に序せられる。76歳で死去。



上杉茂憲公の写真

日本史主要年表

| | | | |
|--------------|--------------|--------------|-----------|
| 1553年(天文22年) | 川中島の戦い | 1701年(元禄14年) | 赤穂浪士の討ち入り |
| 1573年(天正元年) | 室町幕府滅亡 | 1783年(天明3年) | 天明の大飢饉 |
| 1578年(天正7年) | 上杉謙信公死去 | 1868年(明治元年) | 明治維新 |
| 1582年(天正10年) | 本能寺の変 | 1894年(明治27年) | 日清戦争 |
| 1585年(天正13年) | 豊臣秀吉が関白となる | 1904年(明治37年) | 日露戦争 |
| 1600年(慶長5年) | 関ヶ原の戦い | 1941年(昭和16年) | 太平洋戦争 |
| 1603年(慶長8年) | 徳川家康が江戸幕府を開く | 1945年(昭和20年) | 連合軍に降伏 |

スペシャル インタビュー

上杉邦憲氏 と 宇宙



アンドロメダ大星雲

上杉邦憲氏は、1966年に東京大学工学部航空科宇宙コースを卒業後、同大学院航空学専攻修士課程を修了し、1977年に同大より工学博士号を取得、翌年に同大宇宙航空研究所助教授、1981年には文部省宇宙科学研究所教授に就任、2003年に宇宙航空研究開発機構の教授を務め、日本の宇宙工学分野をリードされてきました。上杉氏に、ご専門の宇宙のことについて質問してみました。

- Q** 日本の宇宙開発の水準は、世界的にみてどの程度ですか？
- A** 宇宙科学分野では世界のトップレベルにあることは間違いありません。しかし、近頃は現場から距離が遠くなって、パソコン等机の上で処理する傾向が目立ち、憂慮しています。たとえば、衛星を発注・審査・受領というやり方で、ほとんど現場に行かないのは、常に世界最先端を目指さなければならない宇宙科学技術には適しません。現場を知らなければ新しい発想やさらなる発展が望めないのではないのでしょうか。
- Q** 子供じみた質問で恐縮ですが、地球以外にも知的生物はいるのでしょうか？ また、UFOは地球に飛んできているのでしょうか？
- A** 私たちがいるこの銀河系でさえ、宇宙から見ればちっぽけな存在なので、地球にしか「知性」がないというのはありえないと思います。ただし、知性を持つ生物がいるかどうかと、地球と同レベルの知性を持つ生物が現在の地球と同じ時期にいるかどうかは、大変難しい問題です。地球ができてから45億年といわれており、人間が「知性」を持ったのはせいぜい数千年で、ほんの一瞬です。UFOについてですが、今の物理学では光を超える速さはありえないので、銀河系のちっぽけな星まで訪ねてくるとは考えにくいですね。

◆ 上杉家の名宝



国宝 上杉本 洛中洛外図屏風
(米沢市上杉博物館蔵)



紺糸威二枚胴具足(上杉齊憲公所用甲冑)
(米沢市上杉博物館蔵)



鹿鳴館の模型。明治初期にはこの建物内に霞会館があった



霞会館のロビー。重厚で落ち着いた雰囲気



上杉氏と取材にご協力いただいた水野氏(右)

社団法人霞会館の前身は明治7年に明治天皇の勅諭により発足した華族会館。公家と大名、勲功により構成されている。
霞が関ビルの敷地に霞会館があり、同館は霞が関ビルの一部の持ち主でもある。
34階に会館の機能を有している。旧華族の末裔が日本古来の伝統や文化の普及・伝承活動、社会福祉等公益に関する事業及び助成を行っている。

◆ 霞会館(東京都千代田区 霞が関ビル34階)

旧華族の末裔が日本の伝統や独自の文化を普及・伝承

取材協力

水野勝之(みずの かつゆき)氏

昭和18年(1943)東京生まれ。

成蹊大学工学部電気工学科卒。会社勤めを20年した後独立、スリーケー株式会社・代表取締役就任現在にいたる。主として、設備の自動制御などのコンサルタント。

旧備後福山藩・下総結城藩水野家後裔、元子爵家、霞会館会員(資料展示委員)、尚友倶楽部会員。

著書「加藤清正『妻子』の研究」は熊本日日新聞社主催「熊日出版文化賞」を受賞した。

上毛新聞 新印刷工場「上毛新聞印刷センター」 31万部を2時間で印刷

上毛新聞社の新印刷工場「上毛新聞印刷センター」が
今秋竣工し、当社は給排水衛生・空調設備工事を施工
しました。



印刷センターの外観(北関東自動車道伊勢崎I.C.に隣接)



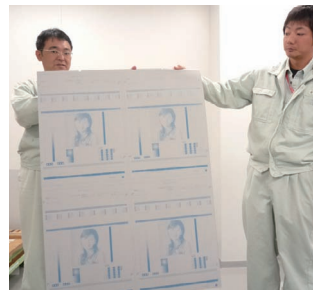
輪転機。高速で回転しながら印刷します



印刷された新聞は自動で梱包され配達のトラックに積み込まれます



印刷センターの天井



紙面データは0.3ミリのアルミ板に書きこまれます。これが印刷の原版になります。



空調機械室

同センターの高速輪転機は2セットあり、まったく同じ新聞を同時に印刷します。2セット合わせて1時間に18万部印刷することができます。カラーの新聞は最大で24ページ印刷できます。同センター稼働後の紙面を見ると、カラー写真が多くなることがわかります。

空調は空冷パッケージ方式(生産エリアは冷却再熱方式)で、衛生は受水槽+加圧ポンプ方式で排水は合流式浄化槽に放流となっています。生産系は空冷チャラーより20℃の冷却水を大型輪転機に供給しています。その他、圧縮空気設備や廃液設備もあり、建物の大きさに比して設備工事は内容の濃いものとなりました。

榛名湖イルミネーションフェスタ

榛名湖イルミネーションフェスタ '09

12月10日(木)～27日(日)開催



主催 ● 榛名湖イルミネーション実行委員会

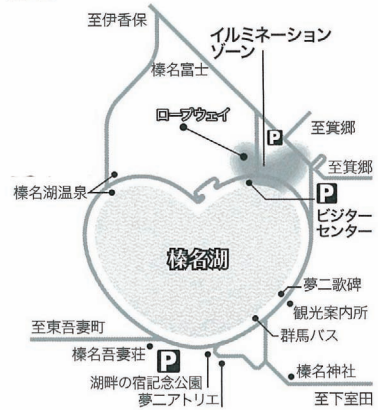
お問い合わせ専用電話 Tel.027-374-9116 はるナビ ● <http://harunavi.jp/>

高崎市榛名支所産業観光課 (榛名観光協会) 群馬県高崎市下室田町900-1 Tel.027-374-5111

● 点灯時間 : 17時～22時

● 打上げ花火 : 10日、17日、27日 各日 17:30～

P 駐車場ご利用の際、
警備協力金として300円を頂戴いたします。



(写真提供・榛名観光協会)

「榛名湖の湖上で行われる「榛名湖イルミネーションフェスタ'09」が12月10日(木)～27日(日)まで行われます。当社はこのイベントに協賛しており、昨年は16日間で約15万人が来場するビッグイベントとなっています。

イルミネーションは電球約30万個を使い、県内最大規模。榛名観光協会の会員や地元の人々が中心となって準備を進めているそうです。

榛名湖は周囲を山で囲まれ、レーザー光線による演出効果が素晴らしく、霧やかすみ、小雨があると幻想的な雰囲気に包まれ、来場者を魅了します。レーザー光線の装置は緑、赤、黄、白などの光を数キロ先まで照射することができ、光と闇のコントラストが人気となっています。

土曜、日曜は混雑が予想され、駐車場に入りづらいこともあるため、早めに現地に到着するように予定を立てる必要があります。

「坂の上の雲」のあらすじ

青春の息吹感じる松山

「坂の上の雲」のあらすじ

司馬遼太郎の歴史長編小説。四国の松山に生まれた秋山好古・真之兄弟と、真之の親友である正岡子規が主人公で、三人が上京しそれぞれの道を歩み成長していく過程を、明治という枠にはまらない時代と重ね合わせ、日露戦争での活躍など希望を持って生まれた人物像を瑞々しく描く。



秋山好古 あきまよしこ
1859(安政6)年~1930(昭和5)年
伊予松山藩で下級武士の子として生まれる。陸軍に入り、日本初の騎兵隊を率い日露戦争でロシア騎兵と戦い勝利を収める。



秋山真之 あきままきの
1868(慶応4)年~1918(大正7)年
日本海軍の参謀で、日露戦争で戦われた「日本海海戦」を勝利に導く。「本日本気晴朗なれども波高し」という名電文を大本営に送ったことで知られている。



正岡子規 まさおかしき
1867(慶応3)年~1902(明治35)年
俳人、歌人、国語研究者で、明治を代表する文学者。写生、写実による生活に密着した作品を作り、短詩型文学の近代化に道を開いた。
(写真提供 子規記念博物館)

司馬遼太郎 1923(大正12)年~1996(平成8)年

新聞記者から作家に転じ、『稟(ふるさつ)の城』で直木賞を受賞。『燃えよ剣』、『竜馬がゆく』、『国盗り物語』などで人気作家となった。『街道をゆく』などエッセイも多数執筆。文化評論を行った。

国民作家としての「司馬史観」

「坂の上の雲」は司馬遼太郎の代表作の一つで、昭和43(1968)年4月から昭和47(1972)年8月までの4年半、「産経新聞」夕刊に1296回にわたって連載された長編歴史小説である。執筆の準備段階として、取材、資料収集などに5年をも費やしたといい、史実に重きを置いた作品となっている。「坂の上」以前の司馬遼太郎は、わずかな手がかりから想像力を膨らませて物語を構成する巧みさ



坂の上の雲ミュージアムの外観
松山の町全体を屋根のない博物館に見立てる「坂の上の雲フィールドミュージアム構想」の中核施設



明治時代将校の礼装
坂の上の雲ミュージアム近くで、秋山好古の勲章を付けたボランティアの方が写真撮影に応じてくれた。

を持つており、こうした手法を駆使し昭和41年に完成した「国盗り物語」などで多くの読者を獲得してきた。しかし、「坂の上」では二転して膨大な資料に裏打ちされた史実に重点を置いた作品となっている。
昭和40年代前半は反体制的な学生運動が盛んであり、こうした時代に明治の軍国主義や日露戦争を肯定的に描く「坂の上」が大きな反響を呼んだのも理解



愛媛県庁付近を走る市電 後方の山の上に松山城が見える。



坊っちゃん列車 明治時代に走っていた蒸気機関車をディーゼル車にして観光用で復元。市中心部と道後温泉間を約15分で結んでいる。

できよう。読者は司馬の歴史解釈、いわゆる「司馬史観」を受け入れ、あるいは否定しつつ読み進め、結果、多くの国民の関心の的となった作品といえよう。
司馬遼太郎は、明治時代初期という維新革命後の激動期に、日本人・日本国家はいかにして欧米列強と渡り合ったか、という歴史的な関心を、「坂の上」という小説の形で発表し、その斬新さにより、大衆作家とは一線を画した「国民作家」となった。



萬翠荘

大正11年、旧松山藩主の子孫にあたる久松定謨伯爵により別邸(萬翠荘)として建設されたもの。社交の場として利用され、皇族方も立ち寄られた。現在は美術館となっている。



秋山兄弟の生誕地

秋山兄弟を解説した映像や写真や手紙などを展示。昭和20年の戦災で焼失、平成17年に常盤同郷会の運営で開設。



復元された生家

復元された生誕地の建物は木造平屋建て95.6m²。当時の資料は一切無く、子孫の記憶などを頼りに再現した。



秋山真之の胸像

海上自衛隊幹部学校(旧海軍大学校)に置かれていたものの複製。兄の好古を見つめるように建っている。



秋山好古大將像

生誕地の門を入ると、右手にある好古の騎馬像。戦時中の金属供出で失われた道後公園にあった像を復元した。



秋山好古の墓

道後温泉から山道を数分上った「鶯谷墓地」にある。東京の青山霊園にある秋山家の墓地から分骨を受け昭和7年に建立。



ロシア人墓地

日露戦争で捕虜となったロシア人を国際条約にのっとり厚遇し、日本が未開国でないことを世界に知らしめた。

軍神・秋山兄弟は下級武士出身

明治時代、従来の国家だった「藩」の廃止に伴い、士族たちは家禄という給料をもらえなくなり、いわゆる失業状態だった。こうした激動期には、むしろ下級武士出身者のほうが、より遅しかったのかもしれない。

秋山好古は安政6(1859)年、松山藩下級武士の三男として生まれた。貧しい家であったため、幼い時から風呂焚きなどの手伝いをして家計を助けていたという。好古の9歳下の弟・秋山真之は、秋山家の五男で明治元(1868)年生まれ。明治維新により生活に困窮していた秋山家では、真之が生まれた時、口減らしで寺に出そうと話していた折、それを聞いた兄・好古が「自分が将来おとうふほどの金をこしらえてあげるぞな」と両親を説得し、弟は家に残れることになったという。「お

とうふほどのお金」とは、豆腐くらいのお金の札束を意味し、庶民にとっては高嶺の花だった。その後、好古は弟・真之の学費を工面し、進学の面倒をみた。

兄・好古は陸軍へ

好古は苦学して師範学校を出たあと、小学校の教員になったが、待遇面と将来性を感じ取り、陸軍士官学校に入学。修業年限が他の兵科よりも1年早く、将校の給料をもらえるのも1年早い騎兵科を卒業した。その後、真之が上京して大学受験の予備校に通いたいと父に懇請し、退けられると、好古は真之を東京に呼び出し、自分の下宿に同居させた。好古は日常、真之を厳しく指導し、それにたまりかねた弟は、兄の下宿から松山時代の幼馴染である正岡子規の下宿に転がり込む。

子規、真之は青春を謳歌

その後、真之は海軍へ

当時、正岡子規も大学受験のための予備校通いをしており、明治17年に東京大学に入学する前段階の「大学予備門（後の旧制二高）」を受験し合格。同級生には夏目漱石もいた。真之と子規は東京で落語、講談などの娯楽を楽しみむなど、大いに学生生活を満喫していた。しかし、兄に下宿代や学費を頼っていた真之は、好古が海外留学すると決まった明治20年、生活費のあてがなくなり、自立することを求められた。そこで、兄が陸軍に入ったからには自分は海軍で身を立てると決意し、海軍兵学校に入学、共に文学を志した同郷の子規と別々の道を歩むことになる。

秋山兄弟は、生活の糧を得るために軍隊に入ったものの、その後、日露戦争を勝利に導くほどの活躍をし、後世に残る軍人となった。たとえ身分が低くても、本人の努力次第で栄達を得ることができる時代であった。また、旧来の「藩」に存在していた武士道を踏襲し、明治の軍隊にも厳然として武士道が生きていた。「明治の精神」とは、西洋に学びながらも、日本の伝統的な精神、とりわけ自らを厳しく律する「武士道」を決して捨てない、という時代背景の中で培われた。

明治に見る江戸の侍精神

倒幕後、明治維新によって身分制度としての武士階級は無くなったが、侍の精神までもがただちに消えたわけではない。江戸時代の学問・儒教には、「修身（しゅうしん）」「自分を修練する、齊家（さいか）」「家庭を平和に安定させる、治国（ちこく）」「国を治める、平天下（へいてんか）」「平和が実現する」という教えがあった。これは、身近なことから順番に整えていくことにより、真の平和が実現できるという教えで、学問をして素養を磨き、国（江戸時代は藩）の発展に貢献することが武士の第二の務めであった。近代国家の仲間入りを果たすべく、「公（おおやけ）に尽くす精神」で活躍した多くの元武士たちがいた。



子規と野球の碑

子規堂の敷地内にある。正岡子規は、大学予備門時代に野球に熱中、「直球」、「打者」など野球用語を翻訳した。



子規堂

子規の菩提寺である正宗寺の境内に建つ「子規堂」。子規が幼少時に過ごした家を再現したもの。内部には子規が使っていた机、墨、遺品などが展示されている。昭和20年の戦災で焼失したが、同21年に再建、子規の旧邸が忠実に再現されている。



正岡子規の書斎（復元）



愚陀仏庵（復元）

松山中学校の英語教師として明治28年に夏目漱石が松山に赴任した時に住んだ住居を再現したもの。「愚陀仏（くだぶつ）」は漱石の俳号。この住居に52日間子規と同居した。昭和20年の空襲で焼失したが、昭和52年に萬翠荘近くに再建された。右は、焼失前の内部。



愚陀仏庵1階



正岡子規の旅姿

松山の奥深さ

表現や発音がおとなしい伊予弁。だがそれはもしかすると芯の強さを覆い隠すためのカモフラージュなのかもしれない。どこかで小さな松山藩で培われたアイデンティティには独特のものがある。松山の人々には、物事を表面的に見ず、奥の奥までじっくり見通そうとする姿勢が感じとれる。その考えの奥深さは、松山県人以外には少しわかりづらいとも映るようだ。

「坂の上の雲」初の映像化

NHKのスペシャルドラマとして、平成21年11月29日(日)から5回にわたって放送中の「坂の上の雲」。映像化されたのは今回が初めてで、大きな反響を呼んでいる。ドラマは平成22年、23年と年毎に第2部、第3部が放送されるので、さらに関心が高まりそうだ。



道後温泉本館の又新殿(ゆうしんでん)
明治32年に建てられた皇室専用の湯殿。昭和天皇は昭和25年に来浴されており、建築様式は桃山時代風の優雅なもの。



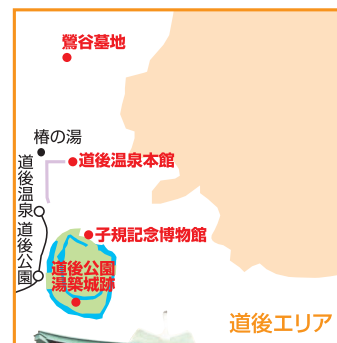
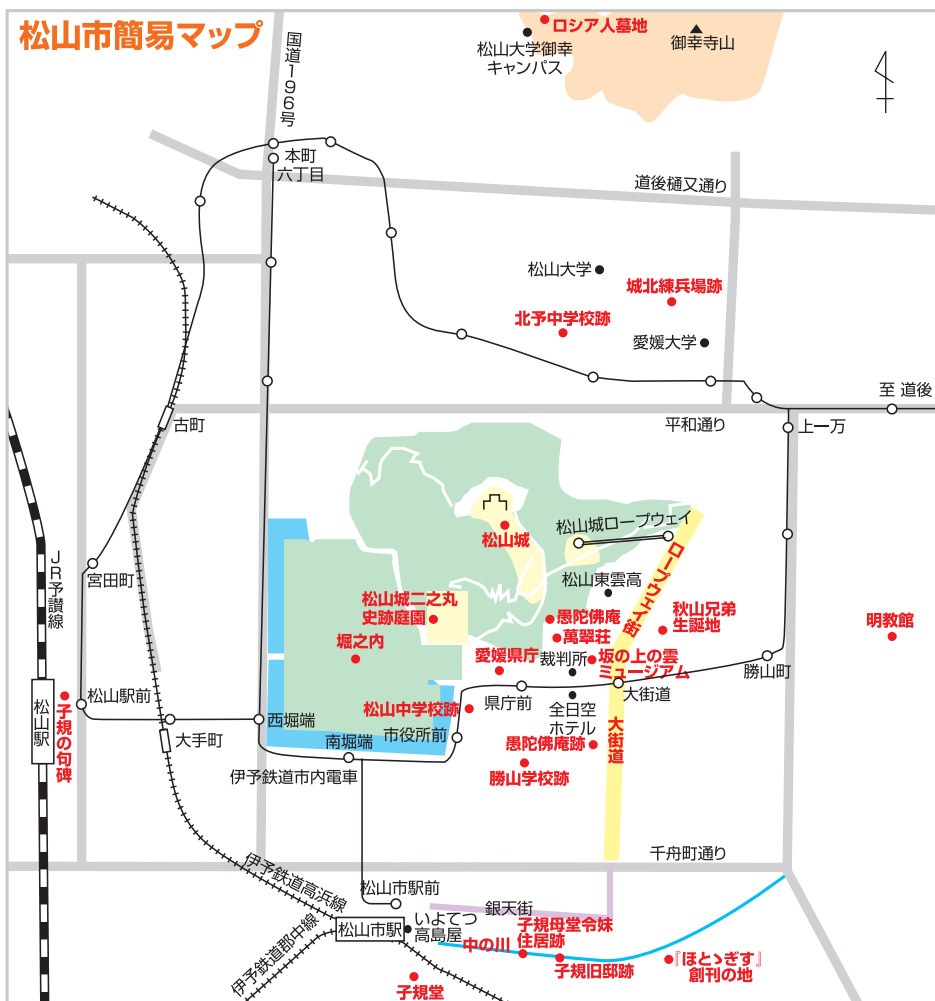
松山城ケーブルカーの観光案内係
明治時代の衣装でガイドしている。松山城を中心に観光施設、駅などに観光ボランティアが待機しているので、気軽に尋ねてみたい。



道後温泉本館の玄関前
夜のように暗い午前6時の開館を待つ行列。浴場は二種類あり、1階の大浴場を神の湯、小さい方を霊の湯と呼ぶ。



道後温泉本館
日本最古の温浴施設。道後温泉のシンボルで、明治27年に建築された三層楼の風格あるどっしりした建物。連日大賑わいだ。



道後温泉駅前の坊っちゃんからくり時計
午前8時から午後10時まで、1時間ごとに、軽快な音楽とともにせり上がり、人形が出てくる。

名水探訪

第三回

少林山の清涼(ちんりゃん)水

群馬県高崎市鼻高町

Text/Naoya Kinoshita
Photo/Norio Ishimori
Naoya Kinoshita



達磨寺の本堂



少林山の湧水



毎年恒例のだるま市



達磨寺の大だるま



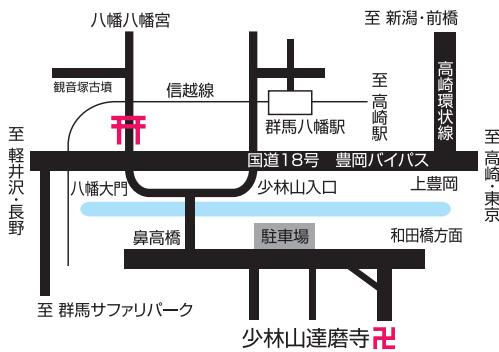
少林山の本堂から榛名山を望む

少林山達磨寺は、毎年1月6日、7日のだるま市で有名です。なじみ深い「だるまさん」の正式名称は「菩提達磨」というそうです。今から千五百年ほど前に、インドの第三王子として生まれた実在の人物で、お釈迦さまの教えを広めるため中国に渡り、嵩山少林寺で修行され、「禅」の興隆の基礎を築かれ、禅宗の初祖達磨大師と仰がれているそうです。

上毛かるたに「縁起だるまの少林山」とありますが、少林山は福タルマ発祥の寺です。いかなる困難に遭遇しても、だるまさんの「七転び八起き」の精神で克服できるように、だるま市は数十万人の参詣者で賑わいます。

少林山の清涼(ちんりゃん)水は、石段を登り詰め、右側の社務所の隣です。高札に「この水は当山真下から湧き出ている清浄な水です」の案内があります。構内には日本各地のだるまを展示している建物もあり、日常の喧騒を忘れ、深秋の一時を過ごすことができました。

(参考資料・少林山の案内板)



株式会社ヤマトPR誌
和's YAMATO 2009 Winter / 第3号 2009年12月 発行(冬号) (季刊・年4回発行)
発行/株式会社ヤマト(総務部) 群馬県前橋市古市町118
TEL 027-290-1891 FAX 027-290-1896 URL www.yamato-se.co.jp



支店/東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎
営業所/軽井沢、伊勢崎、茨城、太田、栃木市、湘南、東松山、新潟、長野
関連会社/大和メンテナンス株式会社 株式会社埼玉ヤマト 株式会社ヤマト・イズミテクノス ヤマト・イー・アール株式会社 大和ビジネスサービス株式会社

わすやまと
「和's YAMATO」の由来

ヤマトの漢字の和、Water & Air の頭文字を合わせてWA、SIはスタート、ヤマトが発信するメッセージです。

